聖霊降臨後第１１主日（特定１６）　　主は天国の門を開かれた　　２０２２．８．２１．

今日の福音書は、イエス様たちがエルサレムへの旅の途中、ある人が「主よ、救われる者は少ないのでしょうか？」という質問をしたところから始まりました。これに対して、イエス様は「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」と言われました。

私達は、「狭い戸口」という言葉よりも、マタイによる福音書７章１３節からの「狭い門から入りなさい」という聖句。もっと一般的には「狭き門」と言うのでしょうが、そちらの方が、なじみのある聖句ですね。

しかし、マタイの方が教えている「狭き門」の話は、狭い門と、もう一方に滅びに至る広い門があって、そちらに人々が殺到するけど、あなたは困難な狭い門を選びなさい、それが命に通じる道だ、というお話でした。広い門の方に人々は引きつけられているんです。マタイの方は、どちらを選ぶか、という問題でした。

ところが、今日のルカによる福音書の「狭い戸口」というのは、同じことを言っているようで、全く違うんですね。「入ろうとしても入れない人が多いのだ。」と言われると、「大勢の希望者が殺到するが、合格者が少ない」、人気のある戸口なんですね。でも、その続きを読んでゆくと、これは競争率の問題ではなさそうです。実はそれは時間の問題なのです。

「13:25 家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは、あなたがたが外に立って戸をたたき、『御主人様、開けてください』と言っても、『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返ってくるだけである。」

今はまだ開いているけど、主人が閉じてしまったら、人々が殺到しても入れてもらえない、ということなんですね。

これは、創世記の、ノアが箱舟を造っているのに、それをバカにしていた周りの人々のことを想像すると分かりやすいかもしれません。ノアが舟を造っている時、入れてくれるように頼めば良かったのかもしれませんが、人々は全くそんなことはしていません。箱舟なんか愚かなことだと思っていたのです。

しかし、洪水が起こった時には、大勢の人が箱舟の戸口の外で、中に入れてくれるように頼んだことでしょう。でも閉じられてしまったら、もうどうしようもない。狭い戸口とは、普段人々が軽蔑していた、目立たない非常用の避難口のようなものを指しているのではないでしょうか。

もう少し、この話の後を追いかけてみて行くと、主人に入れてもらえない人々というのは、主人と一緒に飲み食いをしていたし、広場で教えを受けていた、主人と親しい友人であり、弟子たちだったのです。ところが、その人たちは外に放り出されて、逆に、主人のことを知らないと思われる世界の各地から、多くの人々が神の国の宴会の席に着く、とイエス様は言われるのです。どうやら、世界の人々には別の裏口のような入り口があるのでしょう。

これは何を言おうとしておられるのでしょうか？

すぐに頭に浮かぶのは、善いサマリア人の話です。ユダヤ教の立派な指導者である祭司やレビ人は正しい行動ができなかったが、救いからは遠いと思われていたサマリア人が、一番正しいことをした話です。

これは、ユダヤ人のオゴリを指摘している話として、読むことができるでしょう。パウロが手紙の中でしばしば語っている、異邦人の救いのこと。ユダヤ人のつまずきによって、救いが遠い外国人にまで及ぶようになったこと（ローマ１１：１１～）を、イエス様が語られているのだろうと思うのです。

聖書の初め、アダムとエバがエデンの園から追放されて以来、神様と人間との間には大きな断絶があり、人間の側から神様のおられる天国とか神の国と呼ばれるものへ行く道が断たれてしまっていたのです。ところが、その閉じられていた道と言いましょうか、戸口、あるいは門を、イエス様が開いてくださった、というのが福音書の教えていることです。だからそのイエス様に従って行けばいいのです。

今日の福音書に出て来た「狭い戸口」というのは、みんながバカにしていた、ノアの箱舟の戸口みたいなものだと言いましたが、この軽く見られた戸口のことを、私は、別の言葉で言えば、「石」にたとえることができます。

今日の旧約聖書の直前、イザヤ書２８章のはじめでは、サマリアという北の町が滅ぼされ、祭司や預言者たちが堕落することが語られているのですが、今日の箇所では、そのような国の危機的状況にあって、神様は都のエルサレムであるシオンの丘に、「堅く据えられた礎の、貴い隅の石」が据えられる、ということが書かれていました。

そして、ユダヤ人たちは、詩編１１８編２２節で「家を建てる者の退けた石が、隅の親石となった。」と歌うのです。そして、イエス様は、ルカによる福音書２０章１７節などで、『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった』と引用されました。

そして弟子のペトロはイエス様の復活の後、エルサレムの議会で『4:9 今日わたしたちが取り調べを受けているのは、病人に対する善い行いと、その人が何によっていやされたかということについてであるならば、4:10 あなたがたもイスラエルの民全体も知っていただきたい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。4:11 この方こそ、／『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、／隅の親石となった石』／です。 4:12 ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」』（使徒言行録４：９～１２）

このように、イエス様こそが、救われて天国に行くための唯一の門、戸口、そして救いの岩だ、ということを教会は聖書を通して語っているのです。

このことは、私たちが通夜の祈りや、お葬式の時、イエス様の言葉として、耳にする箇所でしょう。

お手元の祈祷書では、３８５ページに、通夜の祈りで読む、３番目「父の家に至る道」というのがあって、ここには、イエス様が最後の晩餐の時、弟子たちに、「心を騒がせないでいなさい。天国には、たくさんの部屋があって、私はその場所を整えるために天に昇ってゆくんだ。」と言われたんですね。でも、弟子のトマスはイエス様の言われることが理解できないので質問すると、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとにゆくことはできない。」とおっしゃいました。

今日の福音書では、ある人が「主よ、救われる者は少ないのでしょうか？」と質問し、イエス様は「狭い戸口から入るように努めなさい。」と答えられましたが、それは「狭い戸口から入ると、救われる。」と言っておられるのです。

そして、お通夜で読む３番目の「父の家に至る道」、これはお葬式の福音書としても（３５３ページ）読まれるのですが、大変大切なところですね。そして、お葬式の説教をした後は、「賛美の歌」というのを唱えることになっています。

皆さんは朝の礼拝で、賛美の歌を唱えているでしょう。お葬式の時は、４２０ページの８節から１３節を唱えます。しかし、以前は１節目から何度も唱えていたのです。
大切なのは１０節目「主は死の苦しみに勝ち　天国の門を開かれた」という、信仰告白です。

現在、日本聖公会は、聖餐式を行なえない日曜日、「み言葉の礼拝」という式文を使うように推奨しています。これは、聖餐式とよく似た式文になっていて、今では、朝の礼拝という、祈祷書の１８ページからの式文を使わない教会が増えてきました。そのために、２７ページにある、賛美の歌も唱えなくなったのです。

これはいけない、と思いましたので、宮崎では毎月第１日曜日に、み言葉の礼拝ではなく、朝の礼拝をするようにいたしました。また、今年の４月からは宮崎で信徒だけで礼拝するのは第１日曜日だけになり、第３日曜日は私が司式して聖餐式をしています。また、コロナが流行して主日礼拝を自宅で行わなければならない皆さんには、朝の礼拝か、英国の祈祷書をもとにした、「家庭で守る礼拝」を推奨しています。祈祷書は「信徒の祈りの本」ですから、もっと身近で使っていただきたい。

私が前に勤務していた、宗像と八幡の信徒の人々は、み言葉の礼拝を行なうことを拒否して、今も朝の礼拝を行なっています。その理由のひとつは、この賛美の歌や万物の歌、ザカリヤの賛歌など、聖公会が大切にしてきた多くの祈りや讃美歌を、使わなくなってしまう、という危惧からです。

この賛美の歌について、少し説明すると、「日本聖公会祈祷書解説」によりますと『この歌は聖書にはないが４世紀頃から有名な賛美歌として用いられてきたもの』ということです。

「イエス様が天国の門を開かれた」、というのは、私の頭の中にはずっとこびりついてしまって、忘れられない言葉なんですね。しかし、そのような信仰告白を、多くの教会で日曜日の礼拝に唱えなくなったのは残念なことです。しかし、これに似た聖書の言葉があるので覚えておきましょう。

先ほどの、お通夜やお葬式で読まれる福音書はヨハネによる福音書ですが、それと同じヨハネの１０章９節に『わたしは門である。私を通って入る者は救われる。』と言われているんですね。

今日は狭い戸口とか狭い門が何を意味しているのか、考えてきたのですが、実は狭い戸口、狭い門は、イエス様そのものだ、ということなんです。ユダヤ教においては、イエス様は十字架に架けられて死んだ罪びとと見なされましたが、実はこの方こそ、救いに至るための通り道、戸口であり、門である、ということです。

ユダヤ人たちにとって、まさかそこに救いの道があろうとは思わなかった、ちょうどノアの作った箱舟が、周りの人々には愚かなものだと思われたけど、結局その箱舟に乗り込む者だけが救われたのと同じことでしょう。だから狭い戸口であり、狭い門だと思われたのです。

その戸口はいつまでも開いていてほしいのですが、今日の福音書によると、主人がそれを閉じる時がくるから、信仰の問題を先送りしておかないで、今、救いを味わうために、キリストを受け入れなさい。そうしないと、自分は外で歯ぎしりすることになるかもしれないよ、というのが今日のメッセージのように思います。

賛美の歌にあるように、「主は死の苦しみに勝ち　天国の門を開かれた」ということ。『わたしは門である。私を通って入る者は救われる。』という聖句をもう一度かみしめたい。そしてイエス様の生き方に、本当の人間の生き方、お手本があることを確認したいと思います。